博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　風間 伸次郎

学位申請者　　ウ・ムングンゲレル

論文名　　ナイマン方言の研究

結論

ウ・ムングンゲレル氏から提出された学位請求論文『ナイマン方言の研究』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文の概要

本論文は、中国内モンゴル自治区東南部に位置するナイマン旗で話されるモンゴル語ナイマン方言に関する包括的研究である。

本論文は、長年にわたる現地調査により大量の口語（音声）資料を収集し、その整理・分析の上に構築されている。記述研究をその中心とするが、世代差等については社会言語学的方法も用いている、分析にあたっては、モンゴル文語及び標準音との比較、さらにはホルチン方言、バーリン方言、ハラチン方言などの近隣諸方言との綿密な比較を行って、ナイマン方言を内モンゴル諸方言の中に正しく位置づけることに成功している。

本論文は、以下のような構成になっている。

第 I 部　はじめに

第 1 章 序論

第 II 部　音韻

第 2 章 文語および他の方言との音韻対応

第 3 章 音韻における世代差の研究

第 4 章 音韻体系

第 5 章 音韻のまとめ

第 III 部　名詞形態論

第 6 章 複数語尾

第 7 章 概称

第 8 章 格

第 9 章 再帰所属語尾と人称所属助辞

第 IV 部　動詞形態論

第 10 章 定動詞

第 11 章 副動詞

第 12 章 形動詞

第 13 章 形態論のまとめ
第 V 部　語彙
第 14 章 ナイマン方言の語彙的特徴
第 VI 部　おわりに

第 I 部では、まずナイマン旗の歴史と概況について説明がなされる。次に先行研究の整理と研究方法が示される。先行研究は主にナイマン方言をバーリン方言の一部とするものとホルチン方言の一部とするものに分かれる。内モンゴル自治区の方言区画に関する先行研究の諸説に関する整理もここでなされる。ナイマン旗の総人口は 42 万にのぼるが、交通の便が悪くこれまでに十分な研究がなされていない。分析に用いた資料の収集過程ならびにコンサルタントのバックグラウンドについては研究方法に示された。資料は主に 1999 年と 2000 年に行った現地調査で得た口語の資料を整理したもので、音声記号で表記した 3000 行以上にわたるデータベースとして整理されているものを中心としている。他に社会言語学的なアンケート調査の結果等を資料として用いている。

第 II 部 音韻では、まず文語及び他の諸方言との音韻対応が整理される。音韻の脱落・添加・音位転換もここで扱われる。諸方言との対応の分析から、ホルチン方言との共通性が明らかにされるとともに、ナイマン方言にみられる諸形式は、むしろ川の対岸に位置するオンニョード方言、および歴史的に関係のあったチャハル方言との類似を示すことが明らかになった。

次に音韻における世代差の研究がある。これは 45 項目について、年齢層の異なる 48 名のコンサルタントに調査したもので、世代間での揺れを描き出すことに成功している。すなわち、近年の学校教育およびマスコミの影響により、標準音化がすすんでおり、他方で強い勢力を持つ近隣方言の影響が及んでいることを指摘した。なお発音の様子は、ビデオでも全て記録しており、これは一次資料として貴重な価値をもつ。

しかるのちにこの方言の音韻体系が提示される。モンゴル語諸方言の記述においては、その複雑な母音体系の記述が特に問題となる。本論文では第 1 音節の短母音（非弱化母音）、第 2 音節以降の短母音（弱化母音）、長母音、二重母音に分けて順に考察し、さらに子音と母音調和について整理している。特に問題となるのは一部の先行研究が音素としてたてている前舌円唇母音 y であるが、本論文では具体例をていねいに集め、その出現状況からこれを /ʊ/ の異音と分析している。社会言語学的な調査によってもこの異音の出現に関する世代差を確認している。

音韻に関しては、さらに各音声の出現頻度についても調査を行い、母音調和についても数量的なデータによってその実態を明らかにしている。

第 III 部 名詞形態論では、複数、概称、格、再帰所属語尾および人称所属助辞を順に扱っている。そこに示された多くの記述のうち、特に先行研究との関連から注目すべき点をあげておくと以下のようになる。まず複数の諸形式に関しては、これまで漠然と「複数」とされてきたその意味・用法の違いを明らかにし、特に近似複数などの意味を例証している。格に関しては、近隣諸方言でも十分な記述の無い内部格と時間格の存在を具体例によって指摘している。再帰所属語尾に対格語尾が連続することも具体例によって実証している。

第 IV 部 動詞形態論において、もっとも注目すべき指摘は以下のようである。ナイマン方言では、文語の１人称希望形語尾、２人称命令形語尾、３人称命令形語尾に対応する諸形式が失われ、その意味は他の形式によって表される。副動詞に関しては他の方言との隔たりがさらに大きく、文語・ハルハ方言・チャハル方言などに見られないいくつかの形式を持つ反面、これらの方言に見出されるいくつかの形式を失っている。これらの方言間の異同に関しては、その形成および諸方言の発展の歴史に関する仮説も示している。

第 V 部 語彙では、隣接諸方言との共通語彙の整理の結果から、語彙に関してオンニョード方言との共通性がもっとも高いことを示した。親族名称の調査からは、三親等及びその配偶者を示す語彙を中心に漢語からの借用語が多いことを示し、これを中心にいくつかの語彙分野での漢語語彙への移行の状況を明らかにしている。

総じて、ナイマン方言は先行研究において、バーリン方言もしくはホルチン方言の下位方言とされてきた。本論文では多面的に分析した結果、大きな方言分類の観点からは、たしかにバーリン方言とホルチン方言の中間的な性格を示すことを確認し、他方歴史的な原因により、それらの近隣諸方言とは異なってチャハル方言と共通する特徴を持っていることも指摘した。音韻ならびに語彙の面ではオンニョード方言にもっとも近いことを示した。さらにナイマン方言は、音韻・文法・語彙の全般にわたって近隣諸方言に無い独自の特徴を有することを指摘し、この方言のモンゴル語諸方言における正確な位置を明らかにした。

審査の概要及び評価

上記のように本論文は、先行研究を良く整理し、それに対する問題提起を行った上で、実地調査により収集した資料をもとにナイマン方言の全体像を明らかにしたものである。

本論文において、審査委員により高く評価された点は以下のようである。

・音韻、文法のほぼ全体にわたっての記述となっている。申請者が長年にわたり研究し発表してきた音韻・文法の諸問題に関する諸論文をよく整理・改訂し、それらを体系的に集大成している。

・録画を含め、一次資料としても高い価値を有している。内モンゴルにおいては、これまで民話等の資料が出版されても漢語訳やいわゆるモンゴル文語のみで出版されることが多く、諸方言の実際のテキストを示しているものは少なかった。その点から特に本論文の資料は貴重であるといえる。

・先行研究があげている諸用法の具体例を自身が収集したテキストからていねいに拾い、さらにそれ以外の用法も多く指摘している。

・広くモンゴル系諸言語との音韻対応をみている点が良い。十分な資料によってナイマン方言をモンゴル語諸方言の中で正確に位置づけることに成功している。

・他方、さらに社会言語学的な研究を行って、現在のナイマン方言の言語動態を明らかにすることにも成功している。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からさまざまな質問、コメントがなされた。それらのうち、最も重要な点をあげれば以下のようである。

・異音を音素に整理する際の、条件についての考察が不足している。音韻論の分析に関しては、その細部においてさらに精密な分析が必要である。ただし先行研究の記述の多くは表層的な記述にとどまっており、それらとの比較においては本論文の分析はよりすすんだものとなっている。
・内モンゴル諸方言の口語資料の収集と記述に関しては、B. N. Todaeva などの先行研究にさらに見ておくべきものがある。
・「標準音」としているものと、文語やチャハル方言との関係が十分に明確でない。その定義にはさらに注意が必要である。
・副動詞語尾としているものの中には、いくつかの形態素からなる副動詞句・副動詞的表現も含んでしまっている。形態面での基準を一貫させる必要がある。
・言語接触、特に漢語化についての具体例がもっと欲しかった。この地域の漢語諸方言の特徴についても注意を払う必要がある。
・今後は特にテキストのコーパス・データを CD-ROM などの形で公開して欲しい。語彙集も作成すると良い。漢語およびモンゴル文字で発表することにより、中国・内モンゴルに成果を還元し、当地における今後の諸方言研究の方法論に刺激を与えて欲しい。

これらの指摘も、本論文の全体の価値に対しては何ら影響を与えるものではなく、むしろそのいくつかは本論文の意欲的な試みを認識した上で、さらに建設的な提言を行っているものである。

最終試験における上記のような質問、コメントに対しても、申請者の応答は全てにおいてきわめて的確なものであり、指摘された問題点を申請者がよく自覚し、今後それらを明確にしていくのに十分な見通しと方法論を持っていることが確認された。また今後の課題の解明に申請者が強い意欲を持っていることも感じられた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、申請者 ウ・ムングンゲレル氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。